

子どもの言語環境に根ざした単元構想

— 『大造じいさんとガン』の実践を通して —

青山 千秋

(静岡大学教育学部附属静岡小学校)

A Unit Design Rooted in Children's Language Environment

Class practice of elementary school Japanese textbook "Daizojisan to gan"

Chiaki Aoyama

要旨

小学校第5学年「大造じいさんとガン」（光村図書）の授業実践を報告する。子どもが日常的につかっている「推し」という言葉を手立てに単元を構想することで、【人物像】に焦点を当てながらより主体的に学びに向かう姿を期待して授業実践を行った。また子どもが「大造じいさんとガン」で得た「推し」の視点を生かした学びが展開できるよう、教師が選書した三作品（「クマと少年」「百万回生きたねこ」「かたあしの母すずめ」）においても「推し活」を行い、言葉による見方・考え方を発揮できるような単元構想をした。

キーワード： 単元構想、大造じいさんとガン、言語活動

1 単元の構想とねらい

本稿では、静岡大学教育学部附属静岡小学校（以下、静岡小学校と称する）の第5学年で行った『大造じいさんとガン』の授業実践を報告する。

日々の子どものあらわれを見ていて、ある事象に対して自身の感情を表現する言葉がとても抽象的であると感じることがあった。「すごいよ」「いいじゃん」「ヤバイね」等で肯定的な感情を表現しており、もっと適切に自分の感情を表現することができるようになってほしい思うようになっていった。それができればそのものの良さをもっと広く、そして、深く掴むことができわかり合うことに繋がり、ひいては相手のことを理解することにもつながっていくのではないかと考えた。そのような状況が生まれている理由の一つとして、自身の感情を適切に表現するための「語彙」が少ないということ、そしてもう一つはそう解釈した理由や根拠を語りあう機会が少ないということが挙げられるのではないだろうか。

それともに、子どもの会話の中で「推し」という言葉が多用されていることに気付いた。「私の『推し』はさ、このアニメの～」と楽しそうに推しについて語る姿を見て「推し」という言語活動を設定することで子どもが学びに対してより主体的に学ぶことができるようになるのではないかと考えるに至った。

では、見た目ではなく、その人物の言動が、生き様が「推したくなる」ような人物が登場する教材は何かと考えた際に、小学校の定番教材となっている『大造じいさんとガン』（椋鳩十作／光村図書）を扱うことにした。

作者である椋鳩十は「生きる素晴らしさ」を登場人

物の姿に込めて書いており、特に『大造じいさんとガン』を発表した当時は戦争真っ只中であり、「生きる素晴らしさ」を直接書くことは許されなかった状況だったため、大造じいさんと残雪の姿を通してそれを伝えたかったとされている。その言葉通り中心人物の大造じいさんと対人物の残雪の姿が【情景描写】や【色彩語】をはじめ多くの優れた叙述で生き生きと表現されている。また、仲間を守るために身を投げうってハヤブサと戦ったり頭領として威厳を示そうとしたりする残雪の姿やそれらに対峙した大造じいさんが「ただの鳥に対してのような気がしませんでした」と残雪への見方が変化する物語終盤は、特に読み応えがある。そして、残雪を撃たないという選択をした場面では、「人間と動物」を越えた結び付きに心を震わさずにはいられない。他にも、残雪を撃つために何年もかけて準備をして戦いを挑もうとする大造じいさんの狩人としての生き様、それを見破りガンの群れを守り続ける残雪のリーダーシップなど、読者を引き寄せる魅力的な登場人物の姿が多く描かれている。

時代も価値観も現代とは異なる物語文であるため、子どもにとって難しさを感じてしまう可能性がある。そのため、「推す」という言語活動を設定することで物語をより身近にとらえ、そして、「推す」ためには「どのような登場人物なのか」という視点をもって物語を解釈していくことが求められる。また、【人物像】を豊かに想像するためには、【心情】が直接書かれている【言動】以外にも既習である【語り手】の視点を通して【情景描写】に目を向けることも肝要である。

この単元を通して、今までは意識せずに通り過ぎていた叙述も、実は登場人物の【心情】を表しているこ

とを知った子どもは、より深く物語の魅力を味わい、豊かに想像するだろう。そうして解釈した登場人物の「生き様」から自身の「生き方」を考えることが、人生という物語を力強くデザインしていく一助になることを願って実践を構想した。

2. 単元の概要

(1) 単元展開案

推し活！～	
第①時	『大造じいさんとガン』を読んで、感想を書こう ・教師による挿絵を提示した読み聞かせを行い、初読の感想や疑問を記述する
第②時	感想を共有して、問いをつくらう ・第①時で記述した初読の感想や疑問をもとに、単元の問いについて議論を行う
大造じいさんはなぜ、残雪を撃たなかったのか？	
第③時	「秋の日が美しく輝いていました」とは大造じいさんのどんな心情を表現しているのだろうか？（タニシ作戦） ・この場面における大造じいさん、又は、残雪の魅力的な言動を見つけて解釈する
第④時	「ううむ」と「ううん」の違いは何だろうか？（うなぎつりばり作戦） ・この場面における大造じいさん、又は、残雪の魅力的な言動を見つけて解釈する
第⑤時	大造じいさんはなぜ、残雪を撃たなかったんだろう？（おとり作戦） ・この場面における大造じいさん、又は、残雪の魅力的な言動を見つけて解釈する
第⑥時	「堂々と戦う」とは、どんなことなんだろうか？ ・この場面における大造じいさん、又は、残雪の魅力的な言動を見つけて解釈する
第⑦時	推しについて語ろう ・大造じいさん、又は、残雪からそれぞれが解釈した推しポイントを全体で交流する ・推しの魅力を一言で表し、その理由を交流する
第⑧時	他の作品からも推しを見つけ、推しについて語ろう
第⑨時	『かた足の母すずめ』『クマと少年』『100万回いきたねこ』から推しの登場人物を見つけ、解釈した魅力をまとめて、全体で交流する

(2) 単元の実際

第①時では、「この二人だったらどっちを推す？」と問いかけながらアニメの登場人物を提示した。子どもは、「セリフがかっこいいから」「見た目が好きだから」といった理由を述べながら答えていった。その後、教科書教材である『お手紙』から「がまくん」と「かえるくん」も提示したところ、「お手紙を書いてあげる姿が友だち思いだから」「いつ来るか分からないのに素直に待ち続ける優しさ」といった「見た目」ではない視点で「推し」を発表する姿があった。その

ため、本実践における「推し」とは「登場人物の言動から読み取れる生き様や【心情】から伝わる魅力」であることを押さえた上で『大造じいさんとガン』を範読し、その後「大造じいさんと残雪だったらどっちを推す？」と問いかけた。そして、初発の感想を書くとともに第①時における初読時の「推し」についても書いた。その際、まだ推しが見つけれない場合もよしとすることにした。以下、初発の感想である。

・おとりのガンがはやぶさにやられそうな時、残雪がはやぶさや人間を気にせずに仲間を助けに行くところがゆうかんだなって思った。あと、感動した。私の「推し」は残雪。理由は助けに行ったところが素敵だったから。

・残雪推しになった。ハヤブサが来た時、立ち向かう姿がかっこいい、守る姿も。

・残雪はリーダー？みたいな存在で頭がいいと思いました。大造じいさんもいろんなことを考えて実行しているけど残雪はどんな時も仲間を守っているところがかっこよかった。残雪は自分よりも仲間を守ろうとしているところが勇氣あると思った。残雪がカッコよくて、「推し」です。

・やっぱりどちらも推せないけど（私のタイプではない）。
おじいさん…諦めないところ、優しい気持ち
ガン（残雪）…賢い、えらい、責任感が強い

・（私の推し 残雪）私が残雪を推そうと思ったのは、残雪が自分たちの仲間のガンを守るために、自分の体をはってハヤブサを追い払ったところがカッコよくて、最後までおじいさんのことを恐れずに堂々としていたから。そして、一度失敗したことが、次に活かすために色々考えるとところがカッコよくて、すごいと思った。でも、最後、自分の飼っているガンを助けてくれようとした残雪を殺そうとしたけど、やめたおじいさんも好き。

第②時では、前時の解釈の交流から始めた。「大造じいさんの狩人としての執念を感じたよ」「最後のセリフがかっこいいよね！」と大造じいさんの姿にふれて解釈する子や「残雪って鳥なのに頭がいいよね。だって大造じいさんの作戦を見破っているんだもん」「残雪ってかっこいいよね！だって自分のことよりも仲間を守ろうとするんだぜ」と残雪の姿にふれて解釈をしていた。それとともに「でも、何で大造じいさんはそんなに残雪のことを撃ちたかったんだろう。諦めればいいじゃん」「最後の方に、残雪を撃ちとるチャンスがあったのに何で撃たないのかな」と大造じいさんの行動に対して疑問をいadak子もでてきた。それらを取り上げ、「大造じいさんはなぜ、残雪を撃たなかったのだろう」という問いを立てるとともに、登場人物の

行動の背景にある【心情】を想像し、それに迫っていくことが登場人物の魅力をよりとらえることにつながっていくことを子どもと確認した。以下第②時の感想。

- ・大造じいさんのプライドや根性的なものだと思った。なぜかと言うと、「正々堂々」と言う言葉があったから。ひきょうなやり方で残雪を撃つよりも、また来年の冬にいつも通り鉄砲を使って戦おうと言うことだと思う。
- ・残雪を狙っていたのに撃たなかった理由は、直前にハヤブサから仲間を助けた優しさを受け入れたのかな？ハヤブサとの戦いが終わったあとも、大造じいさんに対して対抗心を持っていて、最後まで正義感が強いと思った。大造じいさんも感動したんだなと思った。
- ・私的には、最後あそこで撃ってしまったらカッコ悪いから。なぜかと言うと、楽しくない！とかそう言う理由じゃなくて、相手が仲間のことを守って弱っているのに、そこで自分の「つかまえない」という気持ちだけだと、優しくない。みたいなイメージになってしまうから。
- ・大造じいさんの気持ちの変化。最初は、絶対捕まえない、みたいな感じだったけど、最後はガンのことを考えていた。気持ちの変化。
- ・何で最後、残雪を撃とうとしなかったのは、大造じいさんのりょうしとして、ひきょうな手でかいたくないと言うプライドがあったんじゃないのかなと思って、プライドがなかったら最後の時点であっていいと思うから。

単元中盤である第③～⑤時では、様々な解釈にふれながら【人物像】を豊かに想像していくために「ウナギ釣り針作戦」「タニシ作戦」「おとり作戦」「終末」と場面ごとに分けて、全体で読み進めていった。その際、「みんなが見つけた『大造じいさん』と『残雪』の推しポイント」という課題を毎時間提示し、それらを発表していく中で生じた疑問を、問いとして置き、解釈を深めていくという授業をくり返していった。その際、【情景描写】の効果にもふれ、登場人物の【言動】や直接的な表現がなくとも、登場人物の【心情】を想像することができることを確認した。

このようにして読み深めた【人物像】を根拠に第⑤時では「大造じいさんはなぜ残雪を撃たなかったのか」という問いの解決に迫っていく。ある子は「大造じいさんの残雪への見方が変わったんだよ」と大造じいさんの変化を、またある子は「それだけ残雪の姿が堂々としていたんだね」と残雪の姿を豊かに想像しながら解釈することができた。このように「推す」ために【人物像】に焦点を当てる学びを展開していくと、「最初は、残雪推しだったんだけど、執念深い大造じいさんもカッコよく思えてきたなあ」「何かこの物語って、

二人がいるから成立するんだよな。だからどっちが推しとか決めづらくなってきた」と解釈が変容する子どもも多く見られるようになってきた。

第⑦時ではそれぞれがまとめた「推し」の登場人物について共有することから始めた。

- ・推すとしたら残雪。なぜかと言うと、仲間を引き連れて賢い選択をして、自分をぎせいにしてまで仲間をたすけるのがカッコいいと思ったから。
- ・推すなら残雪。何でも関係なしに敵と仲良くてもどんなに危険でも仲間（群れ）を助けていくのがいい。特に「いきなり敵にぶつかって行きました」が良かった。自分より仲間を優先して助け、この犠牲をはらっても、仲間を助けるそのリーダーシップがかっこよかった。そこを撃たなかった大造じいさんもよかった。ケガをしても、最後の力で人間に立ち向かうのがすごい良かった。
- ・私は残雪です。理由は、ハヤブサが来るころの場面に理由があります。「残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした」というところがすごく仲間のことしか考えていない感じがかっこいいと思った。私だったらガンを見捨てたかもしれない。
- ・推すとしたらどっちも。理由は、ガンは仲間思いで、自分よりも仲間が助かるために、頭を使ったりぎせいになるいしきがかっこよかった。大造じいさんの理由は、ねばり強いしあきらめがないし、ひきょうな手で戦いたくはないということに、すごく感動した。自分だったら残雪をころします。理由は、自分は狩人なんだしガンをつかまえないと意味がないからです。
- ・私が残雪を推す理由は、自分を犠牲にしてまで他のガンを助けたからです。勇気があってかっこいいし頭領としての威厳が感じられる。頭がよくて、すこしの変化も見逃さないところも仲間を守りたいというのが伝わってきたからです。
- ・俺が推しているのは、両方です。なぜならお互いをフォローし合って、いいライバルだと思ったからです。最初は、大造じいさんはガン一匹、どうってことないと思っていたけど、残雪は、頭がよくて、じょじょに大造じいさんも、作戦をちゃんとねるようになっていったところがいいと思った。残雪のおかげで大造じいさんは今まで流れ作業だったのがちゃんと、考えるようになっていったと思いました。残雪も、油断せず大造じいさんのわなをかいくぐっていくから、大造じいさんの心に火がついてい

ったんだと思います。

- ・推しは残雪かなあ。私があこがれている人は正義感の強い人。残雪は誰のペットとか関係なく目の前にある”命”を助けた。(自分の)ことを考えずに目の前の”命”を助けた残雪が推しです。

友達との交流を通して自身では気付かなかった登場人物の魅力を知った子どもは、その登場人物により思いをもって力強く推していく姿があった。

そして、第⑦時の授業の終盤、子どもに「それらの魅力を一言でまとめるなら？」という投げ掛けをしたところ以下のような表があった。

【大造じいさん】

プライド

狩人だから撃たないと自分の生活がピンチになっちゃうかもしれないのに、弱っている残雪を撃たないというところに大造じいさんの狩人としての“プライド”があると思った。

優しさ

残雪を撃たないという選択をしたのは優しいと思った。優しいっていうのは大造じいさんが強いからだと思う。

【残雪】

プライド

首を持ち上げて、大造じいさんを睨みつけるところが、ガンの頭領としての“プライド”を感じることができた。

仲間思い

いつだって仲間を守るために知恵をはたらかせたり、ハヤブサに襲われている大造じいさんのおとりのガンを助けたりしているから、仲間思いにしました。

【二人の関係】

いいライバル

大造じいさんは残雪がいたから狩人としてレベルアップしたんだと思う。相手がいることで自分を高めることができるその関係が“いいライバル”だと言えるんだと思う。自分にはそんな存在がいないから、羨ましいと思った。

それぞれの「推し」の魅力を一言でまとめると、異なる「推し」であるにもかかわらず「プライド」と同じラベリングをしたり、同じようなラベリングであっても根拠が異なったりすることに気付いた子どもは「何でそう思ったの？」と違いを楽しんでいる姿が見られた。

第⑧⑨時では『かたあしの母すずめ』『100万回生き

たねこ』『クマと少年』の三作品を子どもに提示した。

『かたあしの母すずめ』は椋鳩十作品であること、中心人物である母すずめがひなを守るため、蛇に立ち向かう姿から魅力を子どもが掴みやすいと考えた。『100万回生きたねこ』は、既習教材であり読む負担が少ないと考えた。また「推し」という視点で読むことで新たな魅力を子どもが読むことができることを期待した。最後に『クマと少年』は、『大造じいさんとガン』と同様に人間と動物を描いた作品である。少年とクマのキムルンの関係を読むことで魅力を見つけることができると考えたからである。子どもはそれら三冊を読み、「推し」の登場人物についてワークシートにまとめる活動を行い、交流をした。

『かたあしの母すずめ』

母親の温もり

自分の母親とすごく似ているし、残雪ともにていると思う。仲間思いならぬ、ひな思いだから母親の温もりという言葉にした。

私がいつか母親になった時、子どもを守るかわからないけど、でもやっぱり自分の母もそうだし、必ずそうなりたいから。

優しい心

子どもを守りたい気持ちがいいなと思った。自分も危ないのに必死で命をかけて戦うのが優しいと思った。それだけ、自分よりもひなが大切なんだと思った。それも含めて優しいからこそ、強さと正義感があるのかなと思った。

『100万回生きたねこ』

ちょうど良い関係

近すぎず遠すぎずちょっと遠くて近い関係だと思った。ずっとイチャイチャしているわけでもなく、かといって冷め切っているわけではないけど、口数が少なめだけど、ホッとするような心が通じ合っている感じがする。

ナルシスト

自分のことが大好きなところ。自分だったら何回も何回も死んでいって、やる気を無くして生きる希望をなくしていると思う。でも、自分が好きだから猫は諦めずに最高のパートナーを見つけることができたから、何事も諦めないことが大事。

『クマと少年』

覚悟

今まで少年がクマのことをお世話していたのに、自分だったら死ぬということはすごく嫌だから、自分だったらどんなに少年にありがたくても、死ぬということは嫌だ。クマの自分が死ぬという覚悟がすごかった。

信頼

少年とクマの関係がいいと思いました。それは少年が自分の矢で神の国に送ってくれると信じて待ったから。自分なら「待つ」ということはしないで、そのまま遠くに逃げると思う。クマみたいに「覚悟」と人を「信頼」することが自分もより出来るようになるといいなあと思う。

これらの姿から、登場人物の【人物像】を読み、どの登場人物を「推し」にするかを考えることは、子どもの多面的なものの見方を育むことにつながると言えるだろう。また、推すために自身の言語感覚を発揮させながら表現に合うよりよい言葉を選択する営みは、今後、自身がいただいた感情を相手に的確に伝えられる力の一助となっていくだろう。そして、人生という物語を歩む主人公として彩り豊かなストーリーを編んでいくことにつながることを切に願っている。

(3) 抽出児の表れ

附属静岡小学校では研究方法として「抽出児法」を採っている。そのため、本項は抽出児をAとしての表れを述べることとする。

第①時で『大造じいさんとガン』の初読を終えたAは、以下のように解釈をしている。

最後は、残雪を大造じいさんがかんびょうして、ハヤブサと戦う前の状態に戻した上でにがし、また正々堂々と勝負するのが大造じいさんのガンを取る上でのほこりを捨てずにいるのがとてもよかった。まさに二人は「強敵」と書いて「とも」と読む関係だった。この二人は正真正銘のライバルで、二人ともプライドがある。

Aは、「推しは残雪」としながらも、大造じいさんと残雪の関係において魅力を感じ両者の関係を「強敵と書いて“とも”と呼ぶ」というラベリングをしている。また、「時間的にノートに書ききれなかった感想を書こうと思います」と、Aは第①時が終わった日の日記で追加の感想を書いてきた。

この物語の大造じいさんは、とてもスポーツマンシップがあると思う。理由は、手負いの残雪を家に連れていき、そのままかんびょうして、しかも元気にした状態でまた残雪を逃がしたからです。

スポーツマンシップとは本来「スポーツをする人が備えているべき、明るく正々堂々とした態度・精神」（岩波国語辞典第8版 岩波書店）であるが、Aは大造じいさんが残雪と正々堂々と戦う姿を踏まえて、その言葉を選択している。Aは、単元を通して「強敵（とも）」、そして、「スポーツマンシップ」の二つの言葉を自身の読みの軸として、物語文や他者といった対

象と繰り返し関わっていった。

第②時で教師が「大造じいさんにとって残雪はどんな存在？」という問いかけした際、学級の子どもは「敵」「ボス」「邪魔」など「狩りを邪魔する存在」としてとらえている中でAは「『強敵』と書いて『とも』と読む」と発言し、満足気な表情を見せている。但し、これは決して大きな声ではなく、周囲に聞こえる程度のものであり、まだ自身の中でその言葉に確証を得ているような感じはなかった。

第③時や第⑤時でも「スポーツマンシップ」という言葉を用いて大造じいさんの魅力を解釈しており、当初「残雪推し」であったAであったが、自身が生み出した「スポーツマンシップ」という言葉を軸に読み進めてきたことにより、「大造じいさん推し」に解釈が変容してきている。また全体に向けて共有する際には「ずつとうち、これ言ってるよな」と自分の学びの足跡を自覚している姿もあった。

第⑥時では大造じいさんと残雪の関係に話が及んだ際に以下のようなやり取りが行われていた。

B「戦いを通じて友だちの関係ができていから『戦い=友達』みたいな。戦いがあるから友達ができたみたいな」
A「強敵と書いて‘とも’と呼ぶ関係だ！これは！」（かなり興奮した様子で）
C「好きだね、それ」
A「うん、うち大好きこれ、かなり大好き」

Bの解釈との重なりを認知し、興奮気味に反応するAがいた。また、隣の席にCというAの解釈を共有しうる存在が周囲にいることもAにとって自信を得ていく感覚になったのだろう。その後も以下のやり取りが行われた。

教師「みんなの感覚からいくと、大造じいさんと残雪の二人は友達になったの？」
A「な…か…仲がいい…のか？うーん…」（指を顎に当てながら悩む）
D「戦いを通じた友だちみたいな感じ？」
A「強敵と書いて‘とも’と読むね！うち大好き」（囁み締めるような感じで）
B「ライバル友だち」
A「だから強敵と書いて‘とも’と読むね！」（Cに話しかける）
C「うん？」
A「強敵と書いて‘とも’と読むね」（全体に向けて）
教師「Aさん、教えて」
A「強敵と書いて‘とも’と読む感じね」
E「どういうこと？」
A「ツンデレみたいな？見るからに友だちじゃないけど、その敵なんだけど友情みたいな」（満足げに体を揺らしながら発言）

また、第⑦時では、魅力を一言でまとめる際に以下

のやり取りが行われている。

A「これかな、やっば！（打ち込みしながら）！やっばこうじゃない？Bは何にした？」

C「（自分の考えを述べる）」

A「うちスポーツマンシップにした、大造じいさん」

F「言っているもんねAは、ずっと」

そして、それを共有する際にも

A「何回も言っているんだけど、スポーツマンシップがあると思って。最後のページに堂々とまた戦おうみたいのがあると思うんだけど、やっばそこで堂々とか卑怯なやり方をしないのがスポーツマンシップ。まあ何回も言っているんだけどね」

C「何回も言っているよね」

A「うん、うちこれ大好き。あと強敵とかいて‘とも’と読むね。名言だよ、名言」

自身の解釈に対し「これ好き」「名言」と価値付けているプロセスそのものがA自身を価値付け、次の学びに向かうための自己実現意欲を高めていくことにつながっていったといえるのではないだろうか。

これらの通り、Aは自身が生み出した「スポーツマンシップ」「強敵（とも）」の言葉を軸として読んできた。読み取った登場人物の魅力を伝える言葉として適当であるのか、と他者との関わりを通して絶えず思考し続けながら自分がより納得できる解釈としていく様が見えた。それと共に、それらの言葉を絶えず発信してきたことで自身の解釈の現在地を掴むことができたとともに、その解釈を受け取り続けた他者がAの解釈を知っていくという状況は、よりAが安心感をもって学びに向かうことができる環境づくりに寄与していたといえる。そのようにして生み出された言葉は、以前よりも様々な場面において適切に選択して使うことのできる、その子の中に根付いた言葉となっているのだろう。

3. 成果と今後の展望

(1) 子どもの言語環境に存在する言葉を用いて単元を構想することは、子どもがより主体的に学びを展開することに繋がっていく(学級の姿より)

「推すために大造じいさんと残雪の【人物像】を読んでいく」という言語活動を設定することで、子どもは何のために読むのか？という意識をもって学びを展開することができたと考えている。普段であれば「何のために読むのか？」と物語読解に対して苦手意識を持っていた子どもも、本実践では「ここも推しポイントになるかも！」「どんな言葉でまとめるのが一番魅力が伝わるのかな？」と主体的に学ぶ姿を見ることができた。

その際に、どのような教材を設定するかどうかも大切であると感じた。『大造じいさんとガン』という【人

物像】が生き生きと描かれている文学作品だからこそ、子どもは想像しながら、「推し」の魅力を探すことができたのだと言える。

また、登場人物を「推す」という視点で物語を読み味わった子どもだからこそ、その後の三作品に対しても【人物像】を豊かに想像し、「推しの魅力」をまとめることができたと言える。既習事項を生かして、「推し」の魅力を何てまとめたらいいのだろう？」と言葉による見方・考え方を働かせていく姿があった。「他の言い方ないかな？」「そういう言い方もあるね」と仲間が選択した言葉やその背景にまで想像をして学びを展開する姿がそこにはあった。

(2) 授業の中で自らの内にある言葉を用い、言葉にこだわりをもって他者と共通の目的に向かうためのコミュニケーションを行った子どもは、自身の言葉に対して有用性を感じたり、言葉を操る営みそのものへの満足感を得たりすることで、その経験を一体として言葉を取り込み、よりその子に根付いたものとして言葉を獲得していく(抽出児の姿より)

Aは、中心人物と対人物が正々堂々と戦う二人の関係を「強敵と書いて‘とも’と読む」という言葉を選択してその魅力を解釈していた。自身が生み出した強敵（とも）という言葉が二人の関係性を言い得ているという感覚を得たAは、その言葉を用いて他者と関わったり、他者の解釈と自身の解釈の共通している部分を見出したりすることの加速度を増しながらその言葉の価値が確かになっていく実感を得ていた。B子は共に学ぶ仲間と、それぞれが考える最も適切だと考える言葉を用い「大造じいさんと残雪の関係性」という同じ事象を指さし語り合うことで、その関係性の個々の解釈が共有された共有知となっていることを捉えている。Aは自らの内から選び抜いた「強敵‘とも’」という言葉の価値を確かにしていく喜びを得ると同時に、言葉を用い、複数の仲間と語り合うことで個々の内面にあるものが共有されていく営みそのものへの満足感も抱いたといえる。価値ある「言葉を操る営みの経験」と言葉を一体として取り込むことで、よりAの言葉として自身の中に根付かせていったのだろう。

先行経験で獲得してきた言葉を軸として他者と語り合いながら、他者から得た気付きによって自分のもつ言葉の概念を立体的に捉え直して取り込んだり、言葉を操る営みによって他者と解釈が共有されていくことへの満足感を得たりしていく。このような経験が一体となっていることで、言葉がその子にとって有用性のあるものとなる。そうした言葉は、以前よりも様々な場面において適切に選択して使うことのできる、その子の中に根付いた言葉となっているのだろう。言葉は使い手の映し鏡である。その子が生み出した言葉はそ

の子自身であり、その言葉を通して世界とかかわり、その言葉を一層愛していくことは、使い手である自分自身を愛していくことに他ならないのだ。

本実践は子どもの言語環境からヒントを得て構想した。目の前の子どもの姿をとらえ、その姿にあった授業を構想していくことが国語の学びを充実したものに繋がっていくことを強く感じた。これからも子どもの姿をつぶさに見取り、その姿を根拠にした単元を構想していく。

【参考文献】

椋 鳩十(1988)『感動は心の扉をひらく しらくも
君の運命を変えたものは?』
あすなろ書房

久保田里花(2019)『伝記を読もう 16 椋鳩十 生きる
すばらしさを動物物語に』
あかね書房

三宅 香帆(2025)『「好き」を言語化する技術 推し
の素晴らしさを語りたいのに「やば
い!」しかでてこない』
ディスカヴァー携書